ゴメッツ教授による大学院特別セミナーについて

——仏教と仏教研究における権威の源泉——

兵藤一夫

一九九三年七月と一九九四年（時期未定）の二回にわたって、「仏教と仏教研究における権威の源泉(Sources of Authority in Buddhism and Buddhist Scholarship)」というテーマでミシガン大学のルイス・O・ゴメッツ教授による大学院特別セミナーが開講される。そこで、ゴメッツ教授の方法論を踏まえながら今回の特別セミナーのテーマやその意図について簡単に紹介しておきたい。

ゴメッツ教授はすでに何度か大谷大学に来られ、研究や講演をされている。中でも一九八七年六月には、大谷大学で開催された日本印度学仏教学会学術大会のシンポジウム「私にとって仏教研究とは何か」の講師として、仏教研究の方法について話をされているので、記憶しておられる方も多いと思われる。その時の話は、解釈学に基づいてテキストというものを捉えたうえで（即ち、テキストは本来多様な意味を持っており、読者たちがそこからさまざまな意味を受け取るための媒介に過ぎない）、そのテキストについて既知とされる内容に批判的懐疑的に立ち向かい、さまざまな学問的な方法によるさまざまな文脈の中でそのテキストの隠された意味を正しく理解すべきである、ということであった。ここにはゴメッツ教授が仏教に対して新たな研究方法を模索している一端が示されている。

近代の仏教学は文献学的方法を基礎にして行われてきた。その方法とは、現存するテキストを批判的に校訂し、その校訂されたテキストを異訳や注釈書、関連文献などを参照しながら歴史的思想史的考慮の下で読解していく

ものである。この方法では、テキストおよびその内容（意味）を歴史的ではあるが客観的な事柄、即ち一義的なものとして前提し、それを出来るだけ正確に解釈しようとするのである。

しかし、この「解釈する」あるいは「理解する」とは何であろうか？　解釈学が展開されてくる中で明らかにされるように、解釈する側の主観性、歴史性を無視することは出来ない。我々は何かを解釈（理解）する場合、言語を媒介としている。むしろ、言語によってしかあらゆる事柄、あらゆる現象を解釈（理解）することが出来ないと言ったほうがよいかも知れない。そして我々が習得し保持している言語は歴史的に限定を受けており、しかも絶えず新たな事柄に出会うこと、即ち解釈（理解）することにより絶えず変化をしているのである。

このように絶えず新たなものとして組み直されている言語の構造を我々は意識下に持ちその言語の構造を基盤にして解釈（理解）がなされるので、我々が別の時代・地域の言語で表現されたテキストに出会い、それを解釈するときにも、我々の側の主観性歴史性を離れることは出来ない。テキストに表現されているその言語の文法、語義を習得し、その文化的背景などを知ることによりテキストの解釈を限定していくにつれ、その主観性歴史性の程度は小さくなり理解の共通部分は大きくなっていくが、その度合いは期待するほどではないであろう。テキストと読者の相互依存関係は一つの円環、より正確には一つの渦巻き“spiral”を形成すると言われる。このことは次第に解釈（理解）が深まっていくことを示しているが、一つの普遍的な意味に収束するのではない。また、テキストによっては伝統的な解釈が伝えられている場合もある。しかし、それはある特定の時代の一つの解釈であり、ある一つの文脈における表現に過ぎないのである。

テキストは本来多様な意味を持ち得るのであり、読者との関係のなかで読まれ解釈されていくものであるとするならば、仏教学で対象とされるテキストもまた、それぞれ異なった時代的社会的文化的状況のなかで解釈されてきた、あるいは解釈される可能性があるのである。そして、テキストを解釈することにおける学問的方法とは、テキストを解釈する過程の中でその文脈に合理的な限定を加えていくことであるならば、別な視点を持ち込むことも有効となるはずである。

ところで、筆者はこのセミナーの補佐を勤めるということもあって、この秋にミシガン大学を訪れて直接ゴメ

ツ教授の講義を聴講する機会を得た。講義は学部と大学院共通で、授業テーマは「天と地獄に関する仏教の見解（Buddhist Visions of Heaven and Hell）」であった。テキストは Cowell, Müller & Takakusu eds'/ trans. *Buddhist Mahāyāna texts*; R. Kloetzli, *Buddhist Cosmology*; L. E. Sullivan, *Death, after life and the soul.* であるが、最初の二カ月位は序論として神話や宇宙論についての基本的な考え方を、特に文化人類学関係の論文を読むことによって理解することに費やされていた。たとえば、R. A. Shweder, "Thinking through cultures"; P. S. Cohen, "Theories of myth"; J. Z. Smith, "Map is not territory"; M. Douglas, "The meaning of myth with special reference to La Geste d'Adiswal"; W. Doniger O'Flaherty, *Other people's myths: The cave of echos*; M. Foucault, "Truth and power"; などである。文化人類学などで培われてきた基本的な考え方をもって、仏教のテキストに現われる当該問題を考察しようとするものであった。

文化人類学は現代のさまざまな地域の異なった文化を解釈（理解）しようとするものである。文化人類学が対象とする文化事象は、狭い意味の言語的なものばかりではなく、儀式、制度、風習などのシンボル化されたものも含まれる。しかし一面では、これらもまた広い意味での言語の構造に関わり、相互に影響を与えるものであるから、文化全体の基盤として言語的な構造が前提されなければならない。別な言い方をすれば、文化的諸事象にはその時の言語的な構造が投影されているのである。そうすると、文化人類学において培われてきた文化全体、あるいは個々の事象に対する捉え方は、文化事象の一つの現われであるテキストに対しても、合理的に文脈を限定するものとして有効になるであろう。

文化人類学は文化をさまざまな事象の有機的な総体として捉える中で、その骨格となる宗教や宇宙観などを解釈する。その場合に、神話が注目され、宗教や宇宙観などの伝承、保持には神話が大きな役割を果たしていることが指摘されている。神話は物語の "narrative" 形態を取っている。このような文化全体に占める神話の意味や重要性を踏まえたうえで仏教のテキストを見ていくと、古来からの仏教の学習の片寄った傾向に気づく。宗教的な真理を表現し保存することに関して、論理的哲学的な表現を好み、物語的な表現を軽視してきたのである。この傾向を見直すことは、特に物語的な形態を持った経典

などのテキストに関してそれを新たな文脈の中で解釈することに繋がっていくであろう。

ゴメッ教授は今回の特別セミナーに対してご自身で序論を書いておられる。（『大谷学報』No. 72-1〈一九九三年四月発行予定〉に掲載予定）それによれば、この何年かにわたり、従来の仏教研究のあり方に対して幾つかの疑問点を持っておられるようである。一つには、前述したように、仏教研究における物語的な表現の軽視である。これは、仏教研究が人文科学の他の分野で主流となっている批判理論〝critical theory〟から隔絶しているからである。二つには、前項とも関係するが、西洋的な歴史（進歩）主義にまとわりつかれていることである。我々は物語的に表現された真理の代用として、無意識に論理的哲学的に表現されたものを利用したり乱用したりしている。そのため、物語的な表現は単に論理的哲学的な表現の根拠としてしか見ず、その物語的なテキストが唱える真理（それ自身の文脈における意味）を正しく見ることが出来ていない。これは、長く続いている非神話化の伝統のためであろう。三つには、現代の仏教理解における世俗勝義の二諦説の使用の仕方である。一方で論理的で説得力のある議論、他方で議論の余地のない絶対的な主張に関して、二諦説の恣意的な使用があるように思われる。

これら三つの点は、仏教において〝権威〟を主張したり確立したりすることと関わるものである。更に、フーコー（M. Foucault）などの著作を読むことによって、これら三つは意味と権威の相互関係を探求することに繋がることが明かとなってきた。しかも、これらの諸問題は、単に仏教研究におけるテキストの問題に限られるのではなく我々が意味と権威をどのようにして作り上げているのかという幅広い問題の一例のようにも思われる。また、これらの諸問題を通して多分、哲学的解釈学の広範な現代的問題も語ることが出来るであろう、ということである。以上のような理由から、ゴメッ教授は今回の特別セミナーを〝権威〟というテーマを巡ってなさろうとされるのである。権威ということは、西洋の知的サークルの中でも関心を引いている現代的な問題である。権威という問題の探求は仏教の伝統の探求に光明をもたらし、逆に、仏教の伝統の探求は権威ということに対する我々の一般的な理解に光明をもたらすであろう、とも言われる。紙幅の関係で簡単な紹介となってしまったが、詳しくは、ゴメッ教授ご自身が特別セミナーに対する序論を書いておられるので、それを読んでいただきたい。